

第

9

章

大 間 町 史



大間町の宗教

天妃様御神体（写真提供：大間稲荷神社）
*御神体は、普段は見るできません。

第1節

大間の信仰

1 信仰の原型と天妃様

信仰の原型 信仰とはなんでしょうか。その地域の人々にとって、根源的、究極的な価値や意味をもっている対象に対しての献身的な姿勢、神のように依りどころとして信じることといえるのかもしれませんが。

古くから漁業の村として栄えてきた大間にとって、信仰の原型が「海の神」であったと推察されます。その1つが竜宮信仰です。材木では昭和51年（1976）に小泊沖で捕れたオサガメを神社境内の小さな祠に祀ってあります。このような竜宮信仰はいまも漁師の心の中に信仰の原型として生きづいてきました。

また、弁天島は漁船の目印であるとともに、漁師たちの心の依りどころです。4月3日の大祭「さがさんじ」には、重箱の手製の料理と御神酒を供え、敬けんな祈りを捧げます。

次に東北・北海道地方では、大間にしか祀られていない「天妃様」はどのような人物だったか、また、大間に来た経路を推測しましょう。

天妃様とは 大間は豊富な海の幸に恵まれる一方、海の恐ろしさも人一倍知らされてきました。海の神・船の守護神を崇め、厚い信仰心で多くの神々を祀ってきましたが、中でも、「天妃様」として知られる中国の媽祖^{まそ}信仰が古くから盛んだったのです。元々、海難救助の神とされてきましたが、後に現世利益の神としても広く信仰を集め、中国や台湾、東南アジアなど世界的に信者がいます。

960年3月23日に中国福建省興化府蒲田^{ほでん びしゅう}県湄州島生まれの天妃様は、幼少期より聡明で、人間離れした力を発揮し、遭難船の人命救助や妖怪退治に神力を見せ、987年9月9日、27歳で生涯を閉じたといいます。

天妃様と大間 大間では、天妃様は伊藤家の氏神だったものが、今では大間稻荷神社に合祀されています。

なぜ天妃様は大間町に存在するのでしょうか。正確な記録はありませんが、鹿児島県野間半島説と茨城県那珂湊説の2説があります。

稻荷神社収蔵の『大間天妃縁起』は、寛政5年（1793）に大間を訪れた菅江真澄が記したとされる文書です。



天妃媽祖大権現神社 旧跡の地の石碑

それによれば、元禄9年（1696）ころ、大間浦の長だった伊藤五左衛門が天妃様を神社に祀ったのが始まりとされています。あるとき、大間浦で大間、越前、その他の船が大時化に遭い、難破の危機にさらされました。暗雲の中から姿を現す天妃様が船を救出しようとしたため、船乗りたちの中には大声で「天妃様」と叫ぶ者があり、答えようとした天妃様の口からくわえていた綱が離れ、その一艘は激浪に吞まれてしまったのですが、ひたすら天妃様の加護を念じた大間と越前の船が危機を脱することができたという出来事があったそうです。以来、船主だった伊藤五左衛門が天妃様を祀ったといえます。

天妃様と水戸 もりおか歴史文化館（盛岡市）に収蔵されている、盛岡藩の神社仏閣について記された書物『御領分社堂』によると、「大間の天妃様は水戸からきたもの」とあります。これは『大間天妃縁起』よりも約40年前の1750年代に編集されたもので、経路に関する説明がありませんが、その経路については次のような推論があります。

- ① 延宝5年（1677）、関羽の子孫とされる心越禅師（中国曹洞宗の高僧）が、2体の天妃様を持ち中国から長崎へやってきました。
- ② 当時の日本では同じ禅宗でも臨済宗が主力だったため、心越禅師は幽閉されるも、水戸光圀に招聘され、水戸へ入ります。
- ③ 北方の守りを担う光圀がロシアの動きを警戒して建造した快風丸は、元禄元年（1688）、那珂湊から松前まで調査に来ました。
- ④ このときに、天妃様の一体が大間へ来た可能性もあります。
- ⑤ また、大間の船主だった伊藤五左衛門は、干鮑や海參といった海産物を那珂湊で陸揚げし、大間～那珂湊～江戸～長崎のコースを往来していました。元禄5年（1692）には、光圀が那珂湊に磯浜天妃を祀っていることから、水戸と伊藤と光圀と、浅からざる関係があることが分かります。
- ⑥ 大間と越前の漁船が遭難の危機を脱したのは、4年後の元禄9年（1696）ですから、この年が天妃様の^{せんざ}大間遷座の年ともいわれています。

天妃様行列 天妃様が遷座したとされる元禄9年（1696）から300年後の平成8年（1996）、海の日の大漁祈願祭に合わせ、海上安全と悪魔払いを祈念し、毎年、天妃様行列を実施してきました。大間稲荷神



天妃様

社と姉妹宮である台湾、媽祖信仰の総本山、台湾雲林県の北港朝天宮から寄贈された本尊分身、千里眼、順風耳などからなる台湾人形で構成された行列です。練り歩くときには、大きな銅羅の音や邪気を払う爆竹を鳴らしたり、龍踊りの披露があったり、異国情緒が漂う異色の祭りとなっています。



龍踊り



行列

天妃信仰が教科書に 令和2年（2020）3月、台湾出版社「三民書局」で出版した高校生用の歴史の教科書に大間稲荷神社で天妃様が古くから祀られている様子が紹介され、地元新聞に取り上げられました。



高校生用歴史教科書に天妃様が紹介される（台湾出版社「三民書局」）

2 修験と神社

組織持たない修験が主役 下北には、有格社だけで87社あり、無格社を加えると150社以上となります。下北の神には、一貫した組織や系統は見られません。英雄神や自然神的なものも含め種々雑多で、さまざまな由来があるようです。そのため、神々の名称だけで下北住民の神信仰の組織を決めることは容易にはできません。

下北の神社組織の歴史を振り返ると、明治初期の排仏毀釈や神仏分離といった激変により、明治以前に神社の祭典を担っていた聖職者の体系は壊れ、組織的な神社管轄の再編成が行われました。現在、一部を除いて大半の神官は、修験から神官となった人たちの子孫、縁者であり、多くの資料は消滅しています。

そのため、下北全域にわたり人々の信仰を集めるような強力な神や組織は発展しませんでした。現在、下北で最大の祭典を持つのは田名部神社（むつ市）です。宇都宮市の二荒神社から分霊したものとされ、祭神はあじすきた かひ こ のみこと 味耜高比古根 命 とはむだ わけのみこと 菅田別 命 です。明治まで管轄してきた神官の小笠原家は南部家と関わりがあり、元和（1615～24）のころから始まったとされます。神仏分離により、小笠原家は東通村や田名部地域の社約50社を担当する下北最大の領分を持つようになりましたが、これらの社と田名部神社との間に本末関係はありません。

現在、下北に修験は存在しませんが、江戸時代には非常に大きな力を持っていました。特に田名部、目名、大畑などには多くの修験、山伏が存在し、田名部の大覚院の29社、大法院の18社、目名の不動院の11社などが知られています。修験の多くは熊野系と考えられますが、特に秩序だった組織は持たず、下北に至った経路や系統も異なっているようです。他地域同様、明治の神仏分離を機に下北の修験は宗教の世界から姿を消しました。

3 仏教信仰とオシラ様

寺院形成が遅れた大間 下北の寺院数は、43寺（曹洞宗15、浄土宗13、浄土真宗 7、日蓮宗 2、法華宗 4、真言宗 1、時宗 1）です。僧侶たちは下北以外の地域からこの地に移住してきた例が多く、一代のみで無住となって荒れ果てることも少なくありませんでした。17～18世紀となり社会も安定してくると、寺院は徐々に田名部を中心に組織化されていきます。こうした中、大間でも、19～20世紀に寺院の形成が多くなり、ようやく寺院の形態を整えていきます。

下北の寺院で特徴的なものは、特に北通り地域で「てらこ」と呼ばれる無住の堂夜の存在です。数か所の集落にあるこれらの堂は、所属寺院がなく集落の会長が管理しています。葬儀時には、それぞれの宗派の僧侶を招き執り行われます。「てらこ」は、宗教的儀式的のほか、高齢者の憩いの場でもあるようです。

継続するオシラ様信仰 オシラ様とは、東北地方で信仰されている家の神で、蚕の神や農業の神、馬の神などとされます。

下北地方では土着化されながらも、いまだ多くの集落で息づいているのが、このオシラ様信仰です。御神体は、主に男と女、馬と娘、馬と男など2体1対で祀られているようです。

大間地区では、南家（現戸主南英克氏）に祀られているオシラ様は4体2対（男女）あり、うち1対は大奥村で祀り、その後、神社の別当である目時家で祀られていたものが戦後の昭和20年代に南家に来たとはいえられ、天和年代（1681～84）の御神体です。春には降霊術者や近所の人を招待し、オシラ様を夫婦、花嫁・花婿のように並べ、子どもがオシラ様を背負い赤ちゃんをあやすように遊ばせ、会食をするなどの風習が昭和中期までありました。その後は弘前市の久渡寺で5月（以前は旧暦の4月）に開催する「オシラ講の習俗」にオシラ様を持参し、衣装を重ね着させるなど祈祷していました。この行事はオシラ様を1か所に持ち寄って祭る数少ない貴重な大祭です。

次に竹内家（現戸主竹内滋仁氏）では、2体1対のオシラ様（男女）を祀っています。

由来は不明ですが扱いが難しい神様だと言い伝えられていました。「オシラ様遊び」は当時、大間町内で祈祷できるところへ連れて行くか、または、弘前市久渡寺の大祭に連れて行き、衣装はその時に着せたものです。中には印を押した白い生地のを羽織り、その上には綺麗な着物を羽織っています。竹内氏の父が生前、交通事故を起こしたことがありました。その後、久渡寺でオシラ様を見た住職から誰か大きい事故やケガをしたか聞かれ、ご神体を見ると頭には傷があり、身代わりになったと言われ、事故の事を思い返したようです。

弘前市久渡寺の「オシラ講の習俗」の本家は、むつ市の室館家であったとされ、現在、久渡寺に祀られている室館家のオシラ様は、雛人形のお殿様とお姫様の2体1対ですが、普段は見ることができません。



オシラ様（現戸主南英克氏）



オシラ様（現戸主竹内滋仁氏）

現在の姿（写真）になった経緯は、綺麗に彫られた御神体や木の枝だけの御神体と貧富格差を無くすため、3尺3寸の高さに統一し、着物、冠や首飾りを羽織るようになったとのことである。

大間町内のオシラ様信仰は、奥戸地区や材木地区にも祀っている家、または、祀っていた事があった家もあることから、古来から民衆の生活に根付いていたことが分かります。

奥戸の庚申塔 中国で古くから行われた道教の三尸説^{さんし}に由来する庚申信仰とは、人の体内に三尸の虫がいて干支^{えと}の組み合わせにより60日に1度ずつ巡ってくる庚申^{かのえさる}の夜、就寝中に三尸の虫が人体から抜け出し、その人の罪状を天帝に報告するため、庚申の夜は眠らずに過ごすという習俗です。

日本には平安時代の貴族に伝わり、一般庶民に広まったのは江戸時代です。庚申講として講中がつくられ、現在も多くの方で行われています。通常、年に6回の庚申の日、夕方から堂や当番の家に集合。青面金剛などの掛軸を掛け、般若心経などの経典を読誦し、酒食をともにしつつ徹夜で語り合うという習わしです。

庚申信仰は庚申塔の建立とも密接に関わり、庶民や農民層に広まるにつれ、古来の伝統的な自然石崇拝や塚の建設による信仰の表現法が、塔の造営供養という形になったものと考えられています。

下北の庚申塔のうち造塔年代が分かっている最古のものは佐井村にある宝永6年（1709）の塔です。一方、大間町には、奥戸の春日神社境内の自然石に「庚申塚」と彫られた小さな塔が1基あります。

元来、大川目川の川岸にあったものといわれていますが、製作年代は不明です。奥戸では現在も集落がいくつかの講中に分かれ、当番制により年6回の庚申講を行っています。



奥戸の庚申塔

第2節

大間町の神社

1 大間稲荷神社【大字大間字大間91-1】

にぎやかな天妃様行列 古くは幣帛供進^{へいはくぐしん}の指定神社で、百滝^{ももたき}稲荷大明神と名乗っていました。祭神は蒼稻魂^{あそのみたまのみこと}命に加え、天妃^{てんび}媽祖^{まそ}大権現^{だいこんげん}、金毘羅^{こんぴら}大権現^{だいこんげん}、奥津島^{おくつしま}姫尊^{ひめのみこと}の三神を合祀しています。

享保15年（1730）、能登屋市左衛門が稲荷神を勧請し、寛政6年（1794）には近隣の村と共同で神輿^{みこし}を購入し、寛政9年（1797）には神輿渡御を初めて実施しました。購入先は、『原始謾筆風土年表』によると、寛政6年（1794）、越中から大間、易国間、下風呂へ入ったとされています。

明治初期の神仏分離令によって天妃様の扱いに困惑していた伊藤家の子孫が、明治6年（1873）、稲荷神社に天妃神と金毘羅神を合祀し、明治15年（1882）、現在地へ遷座しました。

また、昭和57年（1982）11月23日には、大間稲荷神社現在地遷座100年祭が行われました。

平成18年（2006）には、神社本庁から第11期神社振興対策教化モデル神社に指定され、平成24年（2012）には町民の寄付金により社殿改築・境内整備が行われています。

現在、7月下旬に大間漁業協同組合主催による大漁祈願祭が行われます。大間稲荷神社で大漁祈願した後、海上で安全祈願でのお札入りの行事が終わると、続いて天妃様行列がスタートします。町中で爆竹を鳴らしながらにぎやかに神社前まで行進します。

例大祭は8月8～11日にかけて実施されます。8日は宵宮祭・神輿、4台の山車が神社前に集合して祈祷し、9～11日には大神楽、神輿と稚児行列、山車の運行が行われます。

平成29年（2017）1月、例大祭で使われる大間地区の山車行列が青森県無形民俗文化財に指定されました。



大間稲荷神社

2 奥戸春日神社【大字奥戸字焼畑53】

観音堂の焼失を経て 由緒に関する確かな記録はありませんが、『下北半嶋史』や『奥戸小郷土史』などをもとに次のとおりとなります。

奥戸と越後との交流が盛んだった寛永16年（1639）8月17日、飛騨高山から越後を経由して十一面観世音を勧請し、若宮観音として現在地に^{びょうどう}廟堂を建立しました。修験の金剛院により管理され、貞享3年（1686）8月15日には^{びょうどう}廟堂が御宮造りに新築し直されました。そして、享保2年（1717）3月、春日大明神が勧請され、現在地の下方に奉祀されました。

さらに文化10年（1813）8月15日に奥戸若宮観音の正面下に稻荷の社が建立されたものの、文化13年（1816）に若宮観音堂が全焼し、ご神体と古記録が焼失してしまいました。

文政2年（1819）、長弘軒の鎮守（田名部海辺33番所の22番）の十一面観音が、若宮観音と同じ十一面観音であったことから、これを勧請して新築再建し、下方にあった春日大明神を合祀しました。

しかし、明治2年（1869）5月、神仏分離令によって春日大明神を祀ることにしたため、十一面観音を長弘軒に返し、春日神社となりました。本社は^{へいはく}幣帛供進の指定神社で、祭神は^{あやめこやねのみこと}天兒屋根命、例祭は8月16～17日にかけて実施されます。大正6年（1917）5月、社殿の大改修が行われ、同年9月17日、遷宮式が実施されました。

天然石の浄水盤 境内には、天然石でできた珍しい浄水盤があります。天明^{ききん}飢饉のころ、お蔵米を積んで江戸へ向かう千石船「亀吉丸」が暴風雨に襲われ、奥戸の鯨場海岸に衝突し船体は真っ二つになりました。村民の救助により幸い死傷者はゼロだったものの、お蔵米は水浸しで商品価値を失いました。役人は人命救助に尽力した奥戸の住民たちにこのお蔵米の払い下げを命じ、飢饉に苦しむ住民たちにとって大きな贈り物でした。このとき、亀吉丸に積まれていたのが天然石の浄水盤です。これを海中から引き上げ春日神社の境内に運んだところ、重いはずなのに軽々と運べたという言い伝えが残っています。



奥戸春日神社



浄水盤

3 弁天神社【大字大間字弁天1】

300年以上の歴史 大間の漁民たちは古来、海の幸、船の守護神を崇拝し、多くの祠を建ててきましたが、その一つが弁天祠です。鰯口には正徳5年（1715）の銘があるため、300年以上の歴史を有するものと推定されます。

大正6年（1917）、弁天島への大間埼灯台建設のため、祠の位置を四十八館の水難救済所の近くへ移しました。すると、天変地異が続発したため、大正9年（1920）、再び島の北端へ戻すと、異変が治まったといいます。

昭和28年（1953）、いか釣り船の遭難が続発したため、漁船から見やすいよう現在地（島の南側）に移転、53年（1978）4月には本殿が完成しました。

平成18年（2006）には神社本庁から第11期神社振興対策教化モデル神社に指定され、翌年7月、本殿・拝殿が改修されました。

平成26年（2014）6月には、稲荷神社宮司より神社本庁宛に次のような回答がされています。

大間の漁民によって建てられた弁天祠が、大間埼灯台建設に伴う移転により、現在の弁天神社本殿の建築に至ったものである。（中略）今回、弁天神社所在地が、国から町へ移管することになり、神社と町とが直接的に借用地取り交わしが出来ないということなので、大間漁協を中に立てて、無償で土地を借り受けできるように、町に『行政財産使用許可申請』をして、半永久的に弁天神社への参拝が出来るよう処置を取りました。

- ・弁天島本殿（厳島神社） 大字大間字弁天1－1
- ・弁天神社拝殿（厳島神社） 大字大間字大間平17－819

祭神は奥津島姫尊おくつしまひめのみこと、例大祭は4月3日です。



弁天神社拝殿



弁天島本殿

4 奥戸稲荷神社【大字奥戸字焼畑53】

奥戸稲荷神社は、幣帛供進がなく、春日神社境内の中に位置し、春日神社に向かって右側に建っています。

文化10年（1813）8月15日の勧請と伝えられ、祭神は蒼稻魂^{うがのみたまのみこと}命、例祭日は9月10日とされています。奥戸地区の高齢者たちは、現在でも勧請日である毎月15日に集まってお参りしています。境内は87坪（約287㎡）。



奥戸稲荷神社

5 材木稲荷神社【大字奥戸字材木川目17】

祭神は蒼^う稻魂^{がのみたまのみこと}命、例祭日は9月10日です。宝暦年間（1751～64）に編集された盛岡藩による『御領分社堂』には、すでに材木稲荷宮の名前が記されているため、少なくとも250年以上の歴史を持つものと推測されます。神社は明治期までは別の場所にあり、建替えの際に現在の場所になりました。現在の建物は昭和49年（1974）6月に新築されたものです。

境内の弁天堂は、昭和51年（1976）12月に建設された祠で大きなウミガメ（オサガメ）が鎮座しています。昭和45年（1970）、材木のイカ釣り漁船第一かもめ丸の船主和田健一氏が小泊村からの帰路の際に潮帆（シーアンカー〈地元ではソッポ〉）に絡まり引き上げられたもので、弁天様として祀られています。



材木稲荷神社



弁天堂

6 春日弁天神社【大字大間字根田内8-430】

弁天島の弁天神社の分祀です。元来、細間崎に位置していた細間弁天祠は、大時化や強風で何度も壊されてしまい、細間港の工事の際に現在の根田内へ移転したものです。

弘化4年（1847）に著された『大間浦の記』には「村の戌亥（西北）に細間の弁財天祠あり、このところニシン漁場なり・・・」とあることから分かるように、江戸時代の細間崎は大間ニシンの漁場でした。

神社に奉納されている鰐口は、表面右側に「筑前残嶋虎吉丸幸作」左側に「宝暦十三年（1763）癸未五月吉日」の銘があるところから250年以上の歴史があります。

平成25年（2013）3月に、鳥居が老朽化により腐敗が多く、建て替えを行いました。



春日弁天神社

第3節

大間の寺院

1 無量山阿弥陀寺 (浄土宗)【大字大間字大間97】

300年前建立の阿弥陀如来像が本尊 阿弥陀寺は、元禄元年（1688）、喜徹和尚が慈恩院殿菩薩のため浄土宗阿弥陀庵として創立したものです。『新撰陸奥国誌』には、宝永2年（1705）、武内伝兵衛が開基し、佐井村発信寺2世観山和尚の開山と記されています。創立当初は発信寺（佐井）の末庵として、法事・葬式のときに佐井から住職が出向いていましたが、昭和4年（1929）に無量山阿弥陀寺の寺格を得ました。

ご本尊の阿弥陀如来像は300年前の建立と伝えられてきました。古くから観音講が行われ、下北三十三番巡礼札所二十一番が本堂阿弥陀如来と向き合い安置されています。年間行事は、御忌会（3月）、お盆と御施餓鬼会（8月）、御十夜会（11月）など。寛政年間（1789～1801）から阿弥陀庵が寺子屋の舞台となり、住職が子どもたちに読み書きを教えました。

観音像は、背後から輝く光の筋を表現した放射光を背負う高さ60cmの木彫りです。半鐘は、正徳4年（1714）、江戸神田の西村和泉の作です。平成30年（2018）、本堂の改修がなされ、境内には新たに南門が建立されました。

総本山 知恩院（京都府） 大本山 増上寺（東京都） 本寺 発信寺（佐井村）

境内 360坪（1,188㎡） 本堂 27.5坪（90.9㎡）



無量山阿弥陀寺

2 太澗山福蔵寺 (曹洞宗)【大字大間字大間98】

宝暦4年の開山 宝暦4年(1754)、佐井村長福寺の8世水月萬江和尚により、地蔵庵として開山されました。福蔵寺に昇格したのは、昭和18年(1943)、長福寺20世のときで、その後、天真学明大和尚の時代昭和51年(1976)に本堂・庫裏・山門が新築されました。

『大間浦の記』によると海岸巡拝18番札所とあり、また、北国霊場88か所のうち66番札所であり、現在は千葉県成田山不動講の大間支部となっています。

平成3年(1991)、大間町内山に5世誠司住職により不動明王・薬師如来・普賢延命菩薩を本尊とする普賢院が、既存の不動堂・薬師堂の再建として建立されました。

福蔵寺の御本尊は釈迦牟尼仏で、周囲にある地蔵堂は弘化4年(1847)に安置された海上安全地蔵尊を祀っています。一方、山形善宝寺の八大龍神堂は、文久元年(1861)に建立されました。また、境内には九州天草66部住庵の石碑があります。

涅槃会(3月15～16日)、釈迦誕生会(5月8日)、旧盆施餓鬼会(8月16日)、座禅会(12月7～8日)などが行われます。

平成30年(2018)には、おおま宿坊普賢院が開山され、完全予約制で禅修行(禅体験・写経・法話)が体験できます。

本山 永平寺(福井県)・總持寺(神奈川県)

境内 約349坪(1,153㎡) 本堂 約113坪(374㎡)



大澗山福蔵寺

3 大海山法香寺 (浄土真宗・大谷派)【大字大間字大間101】

松寿山法性寺（佐井村）の分寺 大正9年（1920）開基と歴史は新しく、佐井村法性寺の12代住職石沢寂良が、当時、大間に在住していた23戸の檀信徒のために、法性寺付属大間説教場を開いたのが始まりです。その後、大間教会と名称を変更し、石澤 徹が教会主管者となって、昭和61年（1986）に現在の法香寺に変更しました。そして、平成21年（2009）4月に宗教法人として承認され、石澤一昭が初代住職となりました。

御本尊は阿弥陀如来です。寺宝として法性寺の経蔵きやうぞうからお迎えした高さ約20cmの聖徳太子立像があり、詳細な製作年代は不明ですが、作風や色彩から江戸初期かそれ以前のものと推定されます。

また、所蔵する本願寺8世蓮如上人れんにょしょうにんの絵画伝記（巻物、掛軸4幅）は、開基の寂良和尚が本山の命によって富山地方を布教巡回した際、信徒から贈られたものと思われ、東北や北海道では見られない絵画伝記です。

本山 東本願寺（京都府）

境内 418.96坪（1,385㎡） 本堂・庫裏 287.92坪（951.81㎡）



大海山法香寺

4 松尾山円融寺 (日蓮宗)【大字大間字大間平28】

昭和期の開創 松尾山円融寺は、ご先祖様の御霊をご回向する御堂、また所願吉祥の御祈願所として、昭和元年（1926）日蓮宗大間教会所と標し開山創設しました。爾来、昭和22年（1947）松尾山円融寺として寺号を公称し、さらに平成元年（1989）旧本堂から現在の本堂への立て替えが行われ、本堂再建と同じくして日蓮聖人の銅像が建立されました。

開山以来、法華経信仰の仏堂として現在に至り、令和元年（2019）第3世松尾融一上人より第4世松尾圭哉上人へと法燈が継承され、寺檀和融にして異体同心のもと令和8年（2026）をもって開闢100周年を迎えます。

御本尊は大曼荼羅で、日蓮聖人の座像や鬼子母神像が鎮座しています。また、円融寺初代住職松尾日融上人より相承された、日蓮宗唯一の門跡寺院、村雲御所瑞龍寺（滋賀県）第10世日栄上人が身につけた袈裟が寺宝として伝わっています。

鬼子母神祭（4月）、施餓鬼法要（8月）、御会式（11月）などが行われています。

本山 身延山久遠寺（山梨県）

境内 約2,160坪（7,140㎡） 本堂 約151坪（499㎡）



松尾山円融寺

5 林清山信願寺 (浄土宗)【大字奥戸字奥戸69-1】

積み出し港として繁栄した歴史を背景として 信願寺は、明暦2年(1656)、良専覚源和尚によって開山されました。戦国時代から江戸時代にかけて、奥戸港を含む下北の港には、北国筋の廻船が木材や海産物の買い付けに訪れていたようです。信願寺が建立されたのも、奥戸港が木材海産物の積み出し港として栄えていた背景があり、本堂に鎮座する岩船観音は、その頃の海運業者らが寄進したとみられ、今も多くの地元漁民が豊漁と海上安全を祈願する祭礼を続けています。

昭和60年(1985)には、本堂・大広間・位牌堂・庫裏・水子地藏が完成し、晋山式と落慶法要が盛大に営まれました。

鏡直し(1月5日)、法然上人忌日(同25日)、善導大師忌日(3月14日)、彼岸会(3月21日)、降誕会(5月8日)、水子供養(5月8日)、節句(6月5日)、盆会(8月15日)、彼岸会(9月24日)、御十夜会(11月13日)などが行われます。

総本山 知恩院(京都) 大本寺 増上寺(東京)

境内 約594坪(1,965㎡)



林清山信願寺

6 梅香山崇徳寺 (浄土宗)【大字奥戸字奥戸93】

大泉寺（盛岡市）の末寺 かつて奥戸は、現在の大間町域の中でも中心街的な存在だったようです。元和（1615～24）から寛永（1624～44）の頃、諸国行脚の途中、下北へ立ち寄った閑徹和尚は、奥戸村に寺院がなく住民が困惑していることを知りました。

閑徹和尚は早速、大泉寺（盛岡市）を訪問し、住職の梅山上人に相談すると、上人は同意し、盛岡藩に堂宇建立を請願しました。これに同意した盛岡藩も快く堂宇建立の用材費用の調達を命じられ、寛永2年（1625）、大泉寺の末寺として崇徳寺が建立されました。

明治42年（1909）に火災に遭い全焼したものの檀徒の網元が大金を拠出し、同44年（1911）に再建しましたが、昭和18年（1943）に再び全焼してしまいました。2度の大火に見舞われ、代々継承されてきた宝物や古記録類を全て失ってしまいました。

境内には、創建時からの湧水があり、人気を呼んでいます。なお、御本尊は阿弥陀如来です。

鏡直し（1月5日）、法然上人忌日（同25日）、善導大師忌（3月14日）、春彼岸会（3月21日）、釈迦降誕会（5月8日）、節句（6月5日）、施餓鬼会（8月15日）、秋彼岸会（9月24日）、十夜会（11月12日）などが行われます。

総本山 知恩院（京都府） 大本寺 大泉寺（盛岡市）



梅香山崇徳寺

7 海雲山長弘寺 (曹洞宗)【大字奥戸字奥戸村157】

下北33番巡礼所の22番 元禄元年（1688）、岱巖高淳首座が長弘庵を開基したことに端を発し、宝永元年（1704年）、佐井村の長福寺の末庵として5世禺学玄智和尚が奥戸に長弘軒を開いたのが開山です。

その後、現在の寺院は、昭和14年（1939）に10世大英禅随大和尚の時代に建てられました。長弘寺に昇格したのは同41年（1966）のことで、長弘庵から16世、長弘寺2世の住職古畑霊泉大和尚の代のことです。

本堂玄関の左右には、密迹金剛と那羅延金剛の2体の仁王像が立ち、仏像安置所には中央に御本尊の釈迦牟尼仏、右に文殊菩薩、左に普賢菩薩に加えて、下北33番巡礼札所の22番十一面観音、聖観音などが祀られています。さらに開山堂には、道元禅師、大権修利菩薩、達磨大師、韋駄天、地藏様が祀られ、それらの奥には三尊合祀所の金毘羅堂があり、金毘羅様と愛宕様と薬師如来が祀られ、これらの諸仏像は全て江戸時代の作です。

また、普通の絵馬札とは異なる「船絵馬」の額が金比羅様に十数枚奉納されていますが、かつて奥戸が通商港としてにぎわった名残の品と考えられています。

修正会（1月1～3日）、金比羅祭（2月10日）、涅槃会（3月15日）、春彼岸会（春分の日）、降誕会（5月8日）、節句会（6月5日）、盂蘭盆会（8月13～16日）、秋彼岸会（秋分の日）、達磨忌（11月5日）、成道会（12月8日）などが行われます。

本山 永平寺（福井県）・總持寺（神奈川県） 本寺 長福寺（佐井村）



海雲山長弘寺

8 松寿山法性寺奥戸分院 (浄土真宗・大谷派)【大字奥戸字小川代4】

法性寺の分院として 昭和27年（1952）、松寿山法性寺の分院として檀徒により新築されました。

本寺の法性寺（佐井村）は、天和3年（1683）に草創され、開基は川原町能登某、開山は田名部徳玄寺二世専受といい、東派徳玄寺下直宗です。

通常は住職が不在で、法事や葬式があるときのみ、本寺の法性寺から住職が出向いてくる故知となっています。

毎年2月28日に報恩講が勤められています。これは「恩に報いる集まり」で、親鸞上人の命日前後に執り行われ、親鸞上人との出会い、そしてともに念仏をして生きる人々との出会いに感謝し、自らのあり方や行き方について考えるという浄土真宗の中で最も大切にされている仏事です。

本山 東本願寺（京都府） 本寺 法性寺（佐井村）

境内 約100坪 本堂・倉庫 49.76坪（164.51㎡）



松寿山法性寺奥戸分院

第4節

大間の神殿・祠

1 普賢院【大字大間字内山48-137】

津軽海峡沿岸で厚い信仰 曹洞宗福蔵寺が別当を司る薬師如来、不動明王、普賢延命菩薩を奉安する院で、明治時代から下北半島や北海道、津軽海峡沿岸住民に厚く信仰されました。

御本尊の普賢延命菩薩像に加え、堂内には善光寺（長野市）で入魂された阿弥陀如来像、衆生を救済する地蔵菩薩像、波岩の上に鎮座する弥勒菩薩像が安置されています。これらの仏像は、平成3年（1991）に突然来山した三重県桑名市の仏師、駒井道峰師によって奉納されたものです。

宿坊が誕生 平成30年（2018）、新たに普賢院に「おおま宿坊 普賢院」が誕生しました。1日1組完全予約制で、坐禅や写経、精進料理を体験できます。ツツジやヤマザクラ、シャクナゲ、スイレン、ヒガンバナ、山野草など四季折々の花々が咲き誇る広大な3,000坪の敷地の中で、心を落ち着けて非日常を体感することが可能です。このほか敷地内には本州最北端もみじの社永代供養の樹木葬墓地があります。



おおま宿坊 普賢院

2 八大龍王殿【大字大間字大間97-2】

150周年を記念し新たに龍王殿を建設 山形県善宝寺の八大龍王神を信仰し、龍神講によって毎年3月、10月に大祭が行われます。

八大龍王とは天部八部衆に所属する竜族の八王のことを言い、拝殿のご神体は万延元年（1860）に建立されたもので、当時の大謀網、廻船問屋の名前が刻まれています。

建立から150年に当たる平成23年（2011）10月、150周年祭の目玉事業として新しい八大龍王殿が建設されました。町内の有志によって結成された新築委員会が3年間の準備期間を経て実施したものです。

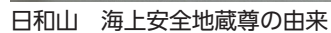
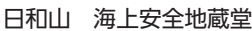
同月18日の落慶式は、紀州藩徳川家総祈祷所である五百羅漢寺（和歌山市）の住職、池田道倪老師を拝請して執り行われました。



八大龍王殿

3

海上安全地藏尊の由来



4 子宝観音【大字大間字内山48】

開湯に関わる由緒 子宝観音は昭和50年代にできた新しい観音様です。

大間温泉養老センターの修祓式が行われたのは、昭和56年（1981）8月12日です。当時、老人クラブ連合会の会長を務めていた安渡鶴三氏が「この温泉は、神が宿って湧き出た」という噂を聞いて、佐井村字福浦に住む知人の金井氏に話しました。すると、金井氏は「実は家で祀っている白滝観音様が夢枕に立って『大間に行く』と言った夢を見た」と語ったという逸話が残されています。

古来、観音様は33の姿に変わって、衆生（人々）のあらゆる願いを聞き入れてくれると言われていました。

早速、金井氏から白滝観音をもらい受けた安渡夫妻は、家内安全、海上安全、交通安全、子孫繁栄とともに大間町の発展を祈願し、「子宝観音」と改名して、昭和57年（1982）7月17日に現在地に小さな祠を建てて祀りました。これが、子宝観音の始まりです。



子宝観音

5 春日優婆尊堂【大字大間字根田内】

春日優婆尊堂は、祠だったものを昭和50年（1975）5月に新築したものです。ご神体は秋田から来たとされる安産の神様「優婆尊」で「うばさま」と呼ばれ、古くから安産祈願の参拝をするほか、海上安全の神様として多くの人々に崇拝されてきました。

境内には「神様井戸」と言われる井戸があり、古くから地域の生活用水として利用されていて干ばつでも水が枯れず、現在も神棚用に水を汲みに来る参拝者がいます。敷地内にはこのほか、青森県無形民俗文化財に指定された大間の山車行事の4台の山車のうち、「仁和賀山」と「大正山」の2台の保管庫があります。

例祭日は、以前は7月20日であったものが、現在は4月3日の弁天神社の祭日「さがさんじ」と同じ日に行っています。



春日優婆尊堂



神様井戸

6 鹿島明神社【大字大間字大間】

鹿島明神社は大間稲荷神社の境内向かって左側にあり、現在の建物は昭和35年（1960）に建設されました。ご神体は優婆尊で上町の三崎家で祀っていたものを神社境内に移したとされていますが経緯は不明です。また、ご神体は、根田内の神様井戸から出たという言い伝えもあります。

安産の神様である優婆尊は「鹿島ばさま」や「かすがばさま」と呼ばれ、自宅で出産するのが当たり前だった時代に赤ちゃんが無事に生まれることを望む人たちが風間浦村釜谷や佐井村原田から参拝に来るほど崇拝されてきました。4月3日が命日で弁天神社の祭日行事「さがさんじ」と同日のため、大間稲荷神社から太神楽会が来て神楽を振ります。

命日やお盆、正月には神前に3種を奉納するほか、以前は「よもぎ」や「しょうぶ」の葉を準備し、参拝者は安産祈願のためにその葉を自宅に持ち帰り、煎じ炒めてお茶のように沸かして飲んでいました。



鹿島明神社

7 地蔵堂【大字奥戸字材木】

材木稻荷神社境内にある地蔵堂の地蔵様は、「お白様」と呼ばれています。嵐に遭って沈没した船が積んでいたものであり、海が治まってから材木の人たちが総がかりで船を引き上げ、後に材木石で囲まれた祠の中に祀り、大切に信仰しています。平成期では町内の建設業者の御厚意により、お白様に雨が当たらないよう材木石の上に屋根を覆い囲むように祠を建築しました。

テレビの取材で地蔵様に取り上げられたことをきっかけに遠方からの参拝者が来るようになりました。



地蔵堂

8 その他



小滝大明神【大字奥戸字黒岩】



塩釜大明神【大字奥戸字新釜】



材木白山宮【大字奥戸字八森】

